

マレーの俚諺



F・スウエッテンハム

山中彰二 謹

謂ふ。

「瓜床と瓜の棟に離れられな
い」 最も親近な友人のこと。

「象は跡みつけた蝶を殺さな
いでジャングルの中を大きな足
跡を残して行く」 あるきまつ
たことに當る時に非常に精密な
注意を拂ひながら、衆人周知の

自分の缺點を等閑に附する人の
ことを謂ふ。

「炎日中でも尙火把をもつて
ゐる」 いさゝかなりとも隠す
ことのない公正な人のこと。

「サロンのことでジャケツ(短
上衣)を着てる」 恐らく二つと
も失ふだらう。他の女を愛らう
と思つて、自分の妻を遠拂ふ人

のことを謂ふ。

「屢々に火をつける」 非
常に有益と揚言しながらその實

「豆が莢を忘れる」 忘恩。
「豆が莢を忘れる」 忘恩。

「水の上に書くやう」 無駄骨
のことを謂ふ。

「鳥が月を慕ひ歎く」 及ばな
いものを憇望すること。

「悲の聲に故郷へ歸る」 金持
べからざるのはなし。

「船首から蛇を操る船」 嘘天
下の家のこと。

「子供を愛するものは時には
もありし方を知つてゐる人を
もあらひ方を知つてゐる人を
傷付けることが出来ない。太陽

愛するものは時には彼女のものと
を離されなければならぬ」
「沈みかゝつてゐる船から水
を汲み出すことが出来るが愛情
の破船では船は沈没する」

「傷は瘻るが創痏(きずあと)
は殘る」 想が忘れられない
こと。

「炎日中でも尙火把をもつて
ゐる」 いさゝかなりとも隠す
ことのない公正な人のこと。

「死なうともしないでうるさ
く生きのびる」 他人の荷物にな
るばかりの怠惰無用漢を謂ふ。

「頭の中に頭を運び出す人が
あるだらうか」 自分の不名譽
をさらけ出するがあるだらう
か。

「太陽を席で被ふことが出来
るだらうか」 大きな過失はか
くしをへない。

「慣れたものが板へば躊躇も
害を及ぼさない」 憎惡も偏見
その爲に立かねばならず、要を

マレー人が俚諺、警句、諺言を愛好することは、既に謂はれ
た處であつた。會話に於いて恰
好な時と處に一つ二つ挿入する
ことを、彼等は決して忘れない。
(俚諺のことの例は、マレー人
の心性と、會話に絶つてゐる爲
に如何に彼等が身後の日常茶飯
事から思付き、比喩、教訓を引
き出しきを、よく讀者に説明す
るであらう。)

「掲無しで首を吊る」 見棄て
られたが離婚されない婦人のこ
とを謂ふ。

「娘が死ぬのは砂糖の中であ
る」 非常に意情な人のことを

うちと一脉のものだ。大きな
輪船がねりて港に泊らなければならぬ

のである。それで、港を守る兵士たる
兵士たるがいる。兵士たるがいるのである。

「あなたがおひいきなら箱が
あればいい。夫が不貞であるなら、
それを彼を裏切りにせしめじてば
けなど。」

「田の中の水をビシヤリと打
てさしつわらが間違ひなく
福にはまつ。」福元の主に里
の慶太。

「一年の年は一日の雨で洗
ひ去られる」一時間のうちに
やは貧弱田間の悪い思い出をお
ひばらす。

「井戸」と仲達ひするものは終
ひには楊の陰に死ぬ。世渡り
は陸分うらじるものである。仕合
を畜するのを拒んでからをつ
く。成上者から信頼するが、西船
のやうをだいぢるが、これら
も田舎を出でた者たるものである。
「西船はやがて必ず海上を横
かけす」櫻痴の骨董。

「世人は、しつかうしてゐる
第一であるが、自分のことにも

うちじりうかる体を立てる。沈み
ぬ頭と人間の上の、既に死を
ながへてゐる、これが木
の上に死んだ。既に死んでしま
はれるが、この蟲虫類は命をね
何と仕置かな。やりだされ
くれば死んでる蟲を御見度に」
たらやう。

「既に死つた蟲の死に人立
つてゐる」恩をかね、へりうし
や諸の仲間入りをしたが、お
たへへ身を切る半精工な入りこ
とおぼす。

「既に死つた蟲の死に人立
つてゐる」半精工、
ひには楊の陰に死ぬ」世渡り
は陸分うらじるものである。仕合
を畜するのを拒んでからをつ
く。

臺灣北端下淡水河附近の、ヤウ
アーチン社、即ち今日潤社と呼
ばれて居るケタガラン族の蕃社
より派生して、臺北平野から若
竹州北部一帯に延び住居してゐ
るケタガラン平埔族の一部がそ
はり基隆の附近にも住候つか
の蕃社を形成してゐた。これが
抑々今日の基隆の蕃族であると
は間違ひであらう。しかし之等
の蕃社は既に山地に移り、ケタガラン
族の慈む基隆の附近では容易
に見られない。大正九年十月の
調査に依ると、基隆市全般を通
じ百七十一名の平埔族が居る事
になつて居るが、散在し且他と
難居して居り、全部がケタガラ
ン族であるか否かは不明瞭であ
る。然し其の遺跡は、廣く基隆
附近に残つてゐると思ふが、以
下その遺跡と思はれる地方に於
ける二貝塚の發掘に付いて述べ
る。

私の住家は基隆員林ヶ濱の近



基隆大沙灣の 貝塚發掘記

河井 隆敏

Sir Frank Swettenham : British
in Malaya, 1906, p. 163-171 42
卷三。

三

は開拓しながら、しかし之等
の蕃社は既に山地に移り、ケタガラン
族の慈む基隆の附近では容易
に見られない。大正九年十月の
調査に依ると、基隆市全般を通
じ百七十一名の平埔族が居る事
になつて居るが、散在し且他と
難居して居り、全部がケタガラ
ン族であるか否かは不明瞭であ
る。然し其の遺跡は、廣く基隆
附近に残つてゐると思ふが、以
下その遺跡と思はれる地方に於
ける二貝塚の發掘に付いて述べ
る。